

## 親しい友に会いに

谷 ゆき

小学生向けの日刊新聞の編集を通じて、毎年20人前後の小学生書評委員と関わる機会に恵まれています。任期の1年間、読者に自分がすすめたい本の書評を書いてもらい、その書評は紙面で紹介します。20人のうち、とても熱心に書評を送ってくれる子が毎年何人かいて、そうした子が選ぶ本には個性が見えます。

昆虫が大好きで、卵から孵化させ飼育している3年生の女の子は、昆虫にまつわる学術書まで読みこなす程の読解力があり、餌となる植物の知識にも長けています。「生き物が大好き」といって最初に恐竜図鑑の書評を送ってくれた5年生の男の子は、任期最後の3月、2011年に起きた東日本大震災の翌日から1か月にわたって書かれた「天声人語」を収めた本の書評を送ってくれました。生き物が大好きな少年の心には、命を尊ぶ気持ちがしっかりと育まれていると感じました。

高学年の書評委員4人で読書会をやったこともありました。課題図書にしたのは岩波少年文庫版の『ジャングル・ブック』でしたが、それぞれが一番好きだというキャラクターはヒグマのバルーと黒ヒヨウのバギーラに分かれましたし、好きなシーンも四者四様でした。

本は、そう望めば、知りたいという欲求に応えてくれます。それだけにとどまらず、興味の幅や自身の世界を大きく広げてくれることもあります。そしてまた、どう読もうと、どう受け取ろうと、それは読み手に委ねられて自由なものであり、だからこそ、意見交換をする場を得る幸運に恵まれると、自分ではない他者それぞれに固有の読み方、考え方があることを知るきっかけにもなるのだと思います。1冊の本が、なんてたくさんのことと自分をつないでくれるのでしょうか。

つい最近、2人の書評委員から「谷さんが子どもの頃はどんな本を読んでいたの？」と聞かれました。本ばかり読んでいて、よく兄から「本の虫」と罵られていた小学校低学年のころ私が好んで読んでいたのは、宮川ひろさんの『るすばん先生』や『おかあさんのつうしんぼ』など、「かぎっ子」が主人公の本でした。両親がともに働いていた私もまた「かぎっ子」だったので、そこに描かれている主人公に深く感情移入し、彼らの苦しみや悲しみをわがことのように感じ、「ここに、私の気持ちをわかってくれる人がいた」と喜びました。

私がこれらの本に出あったのは、児童館の図書室だったと思います。おそらくそれらは、児童館の先生がさまざまな家庭の事情から放課後の時間を過ごさなくてはならない子どもたちのために選んでくれた本だったのです。長い時を経てそのことに思い至ったとき、作者のみならず、直接的にであれ間接的にであれ、本と出会うきっかけを作ってくれた人の思いまでもが込められているのだと改めて実感しました。「本は、たとえたった一人でも、だれかの心に届いて、心を揺さぶることができればいい」。尊敬する作家の言葉です。小学生の私は確かに『るすばん先生』や『おかあさんのつうしんぼ』に励まされ、救われました。

「将来は先生になりたい」と思っていた私にとって、魅力的な学校の先生が登場することもこうした本に惹かれた一因だったかもしれません。「先生」つながりで『赤毛のアン』や「小さな家」シリーズを貪るように読み、空想することで現実世界の生きづらさから自分を解放する術を覚えてくれたのも本でした。

私にとって「本」は、いつでも私自身を受け止めてくれる「友」のような存在です。ときに肉親以上に自分を理解してくれる親しい存在であり、悩みの解決の糸口をくれたり、物事を考えるきっかけを与えてくれたりします。

さあ、今日も友に会いに行こう。

(たに ゆき：朝日学生新聞社)

## 岩崎書店を訪ねて

—皆さんは「岩崎書店」と聞いて、どんな本を思い浮かべられるでしょうか？本のタイトルを聞いてすぐに表紙や内容が浮かぶような、印象深い本を数多く刊行されていますね。前身である「慶応書房」の創立から数えると創業84年という歴史ある岩崎書店を訪ね、編集部の鹿島篤さんにお話をうかがいました。—

### 学校図書館向けの本作りについて

勤続25年となりますが、2年前に営業部から編集部へ移り、学校図書館向けの本作りを担当しています。13名の編集部員（うち男性は4名）で、全員が2年に1本は図書館向けのもの手がけていますが、専属は私ひとりです。

図書館向けのセットや書籍を1年に十数アイテム作るとりまとめをするのが仕事で、私も数アイテム作ります。図書館向けの本は特に、たくさんの人たちとの共同作業で作られています。編集プロダクションやデザイナー、イラストレーター、カメラマン、もちろん著者の先生、監修者の先生、更には校閲会社、印刷会社、製本会社…。それらをまとめるのが編集者の役目で、それに尽きると思います。

たくさんの方のプロの方に関わっていただくことで、情報や本自体の質を高めることが出来ます。また、岩崎書店らしい本にするために、パッと本を開いた時に子どもたちにわかりやすく、親しみやすい紙面作りを心がけています。

### 本の企画について

最近の学校図書館向けの書籍は、テーマが細分化していますね。昔だったら極端にいうと社会科全般で1セットという括りだったのですが、今は歴史の中の日本史の、その中の「近代史」の中から更に掘り下げたテーマで数冊のセットを組むという風です。ですから、本のテーマ決めということが非常に重要になってきます。現場の需要にあわなければ、全く売れないということもありますので。

企画のための情報収集には、現場の方々のお声を聴くのが何よりです。取次会社主宰の公共図書館・学校図書館向けの展示会で司書さんに

直接お話を聞いたり、会場の取次の方に教えてもらったりしています。あちこち通う中で、顔なじみの司書さんも出来、今どんな本が必要か、どんなテーマが旬か、教えていただくこともあります。しかし、司書の方々の要望は実に多様ですね。具体的な上に多岐にわたるため、中々応えられないという難しさも感じています。

営業部にいた頃は、学校巡回にもよく行っていました。最近は先生方が忙しくて、巡回そのものがかなり減っているようです。以前はそうした機会に、先生方が「授業に使えるぞう」などと和やかに本を見ながら買ってくださいていましたが、今は司書の方たちが展示会で実物をご覧になったり、ネットで内容を調べたり、非常に吟味して本を買ってくださる。ずいぶん購入形態が変わってきたなと感じています。

弊社のセットは、ほとんどが分売可ですので、バラで「この1冊だけ」と購入されるケースも非常に増えています。限られた予算の中で、いかに必要な本を多様に揃えるか、お知恵を絞っていらっしゃるのですね。

そうすると、セットの中で売れ行きにバラつきが生まれます。ある1冊が非常に売れてしまうと、重版をどうしようか、他の本の在庫管理はどうしようかと、頭を悩ませていました。

そんな背景もあり、セットではなく単品の、1冊で完結する「調べる学習シリーズ」の刊行を始めて4年になります。従来の図鑑などとはひと味違う、ユニークなテーマや切り口を目指したシリーズで、1冊でテーマを掘り下げています。『ルイ・ブライユと点字をつくった人々』や『カレーの教科書』など、とても好評です。新刊の『鳥獣戯画をよみとく』も、人気の絵巻でありながら子ども用にまとめた本はあまりな

かったので、注目いただいています。(鹿島さんが企画された「火星」の本も、今冬刊行されるそうです。お楽しみに！)

### 最近刊行された本について

昨年刊行した『国際交流を考える本 10か国語でニッポン紹介』(全5巻)は、2020年の東京オリンピックに向けて、国際交流に関する意識がさらに高まることを見据えて作りました。これまで、世界の国々の文化や暮らしを紹介する本は、多数刊行されているのですが、日本のことを世界の人々へアピールする本はほとんどなかったのです。海外からの観光客も非常に増えていますし、子どもたちが日本のことをさまざまな言語で伝える手助けになればと期待しています。また、タレントのパックンに関わってもらえたことで、さらに紙面が親しみやすいものになったと自負しています。

それから、最近刊行した『やさしく解説 地球温暖化』という3冊のシリーズは、子ども向けのインターネットの検索サイトで、「地球温暖化」という言葉がここ数年常に上位にあるというデータをもとに企画したものです。子どもたちが何を調べようとしているか、何を知りたがっているかも、常に気にかけています。

### これからの本作りについて

「調べ学習」という学習活動が盛んに言われ、その一つの手立てとして「本で調べる」ということが勧奨され、学校向けの本に対する期待が一挙に上がったのですが、最近「インターネットで調べる」ことを奨励する先生方も増えています。例えば生き物について調べる場合も、誰かの趣味のブログというようなものでなく、環境省のホームページなど必ず公式のものを参考に、などときちんと指導されているようなので、そうであれば新しい情報にあたるのでとてもよいことだと思っています。

本はどうしても年をとりますからね。それが難しいところです。また、情報の扱いについて



『少年の観察と実験文庫』シリーズ  
モノクロの写真がかっこいいです！



新刊本が並ぶ棚

も、どの時点のどの情報

を使うか、判断に悩むこともあります。例を挙げれば、オリンピックの各国のメダル獲得数。ドーピング問題などでどんどん減ってってしまうのですよ。

学校に置いてもらう本ですから、本の中の情報の信憑性は、常に一定のレベルに達しているよう肝に命じています。校閲も専門の会社に外注し、細かいところまでしっかりチェックしてもらっています。以前は、編集者がひとつのセットをじっくり一から作るということもありましたが、とても大変なことです。編集プロダクションや校閲会社の人たちとタッグを組み、何人も目を通して本を作っていくことで、情報も可能な限り正確になると実感しています。本ならではの良さはそこにあるのではないのでしょうか。

その手の本がなくて困っていたというようなテーマをみつけて本を作り、学校に置いてもらうのが、私たちの使命だと考えています。そして、本を実際に手にする子どもたちにとってわかりやすく、楽しく読めるもの、好奇心が広がるようなものを作りたいと心がけています。どこからも出ていない新しいテーマの本、出したいですねえ！

最後に、岩崎書店の初期の本が並べられている会議室を拝見させていただきました。その棚に、『少年の観察と実験文庫』、『少年少女の技術・工作文庫』などを見つけ、大興奮！戦後、これからの日本を作っていく子どもたちに向けて、新しい知識を得る喜びや世界に出ていく力を、と発刊されたシリーズは、今なお光り輝いて見えました。そのような精神を脈々と受け継いで、時代に即した本を丁寧に作り続けていらっしゃるのですね。更なるご発展を祈念いたします。

鹿島さん、ありがとうございます！(LAS探検隊)

## 小学校図書館着任 1 年目の事始

杜 ゆき子

小学校の図書館利用は主に中休みと昼休みの 20 分。階段を駆け上り、息を切らして 4 階にある図書館の扉を開けて入って来る子ども達の笑顔に毎日幸せを貰っている。一通り返却が終わると、質問に答えて書架を案内する。「おすすめの本は何ですか?」「短くて面白い本は?」「戦争の本は?」「猫が主人公の本は?」「次、何読めばいい?」・・・そこでインタビューを開始し、お目当ての本に辿りつくまでの対話を楽しむ。

急な調べ学習で図書館利用していただき、資料相談に応じることもあるが、学期毎に必要な資料を学年主任にアンケート調査し、大半は事前に準備させて頂いている。そこから派生して、展示コーナーも設置する。例えば、4 年国語の「プラタナスの木」から「主人公は小学生」、1・2 年生の国語で「昔話を読もう」などのテーマで選書した本の紹介リストを作成し展示した。そのようにして全学年が図書館資料を教科学習に取り入れて頂いている。

1 年生は 4 月にオリエンテーション、夏休み直前に「感想文にお薦めブックトーク」、2 学期には「昔話お話会」を実施した。お話を届ける機会に恵まれると、子ども達との距離が縮まり、より充実した図書館利用へつながっていると実感している。図書担当教諭が 1 学年主任で、1 年生から全学年へと図書館活動を周知し、推進にご尽力下さっている。

毎週火曜の 4 時間目は支援学級のお話会を実施させて頂いている。手遊び童唄・詩の朗読・お話または読み聞かせとプログラムの型は次第に定まり、子ども達が主体的に参加してくれるようになった。

朝の読み聞かせは月一で、順次全クラスに入り、お話を届けている。読書活動の素地作りに、

ストーリーテリングや読み聞かせは欠かせない業務のひとつだ。夏休み開館中は低学年を中心に対面読み聞かせをし、冬休みはお話会を実施した。秋の読書週間には、東京子ども図書館でご教示頂いた児童室企画を参考に『本で世界の国めぐり』と銘打って五大陸別に世界各国の本を展示し、図書リストは全クラスに配布した。期間中、館内で依頼があれば、いつでも読み聞かせをすると告知したが、展示図書の紹介に追われ、読み聞かせをする時間はなかった。

### 図書館に来て本に出会ってもらうために

4 月当初、図書委員会で決めた今年の目標は、貸出冊数昨年超えだった。児童は貸出冊数を気にする子が多く、冊数を増やすことに懸念になっている。そのためか、厚みのある本に中々手が出ない。読書傾向に偏りがあることも否めない状況であった。そうした傾向を改善するために、低・中・高学年向け基本図書リストを作成した。読んでクイズに答えたらシールを貼れる形式で、図書展示コーナーに設置したが、低中学年を中心に浸透するも、高学年は少数に限られた。

夏休み前には第 2 弾を作成し、自由読書感想文課題図書として勧めたが、利用は JSLA 選定課題図書に傾いた。クリスマス展示図書には、ツリー絵柄の葉を付けたところ反響があった。新年を迎えて最初の展示テーマは「キミは、なに年?」。十二支の動物たちの本を並べ、貸出者には、お手製戌の消しゴムスタンプで葉作りを提供したところ、これも口コミで広まった。年度末まで 2 カ月を切ると、進級・卒業に向けて、「新しい道へ進む本」「卒業までに読んでほしい本」を展示した。展示コーナーをやることで、普段書架に埋もれている本を読んでもらう

ことができている。また、展示図書や新たに購入した本は、毎月の図書館便りで紹介し、来館を促している。

### 司書としての使命、そして願い

子ども時代は短い。感受性豊かな子ども達だからこそ、質の良い、人生の真実と希望を描いた豊かな児童文学や科学読み物に出会ってほしい。そして生涯に亘って充実した図書館ライフを送り続けてほしいと願う。生き辛い社会の中で、心の杖となるような本を読むことができる素養を学校図書館で培えるよう努めたい。図書

館存続が危ぶまれる今日、歴史の中で継承されてきた文化を次世代に手渡していくことが、図書館に託された使命であることは言うまでもないのだが、その道が険しいことも痛感している。

さて、今日も新米司書は子ども達のための居心地のいい図書館作りを実現するために、本を読み、お話を覚え、水面下で手足をバタつかせている。そして、図書館を訪れる子ども達の真っ正直で柔らかい感性から沢山のことを教わり、司書として養われ、本の世界で遊ぶ子ども達の笑顔という喜びの報酬を頂いている。

(小学校図書館司書)